

## 吾妻山有情

日本山岳会 No.7734 木村喜代志

吾妻連峰は山形県の母なる川、最上川が産声をあげる山域である。大河の風格をもつ最上川に相応しく、吾妻の山々は飯豊山地へと続く一連の山脈となって大らかな起伏で重く腰を据えている。今なお火山活動を続ける山、過去の活動の様子をそのまま留める山、全山オオシラビソ、コメツガに覆われた山、火山の教科書から抜け出してきたような形の整った山と地形、更には、稜線上に池沼が散ばっており、全体としてなだらかな山なみで親しみを覚える。

しかし、山に登り始めた山形での高校時代を思い起こすと、長期の休みには朝日連峰、飯豊連峰の長大な尾根へ、週末には蔵王、月山と近郊の山々へ向かうのが常で、どうしても吾妻は疎遠になる傾向にあった。

高校山岳部同期の SM は、何故か良く吾妻に通っていた。彼から刺激を受け、一切経山を下って訪れた浄土平の吾妻小富士や桶沼、姥ヶ原の鎌沼で遊んだことがあった。秋晴れの週末にもかかわらず 1 人の登山者とも会わなかった。まだ、吾妻スカイラインが開通する前の話である。

また、雨上がり東大巔を中心とする主稜線のぬかるみは、山靴を容易に飲み込む深さである。笹で被われたところもあり、膝下は泥まみれになるのが常だった。山岳部顧問の YS 先生は、当然のようにゴム長に履き替え、遠慮なしにぬかるみに足を入れて行くのを羨ましいと思いつつも、ゴム長持参に踏み切れなかった高校時代を思い出す。

吾妻十湯の言葉どおり、どこの登山口も出発点は温泉である。その一つに滑川温泉がある。紅葉が山肌を染め始める頃、友を誘って出かけたことがあった。自炊部屋をベースにして、今日は滑川大滝、明日は姥湯で手造り露天風呂、翌々日は堀田林道経由で兵子に足を伸ばしたりしたのは、混浴にまだどぎまぎした年頃の思い出である。

学生の頃、朝日連峰の積雪、尾根と谷の形など写真を撮っていたことから、1964 年から始まった県の吾妻連峰総合学術調査団地理班の末席に加えてもらった。これまではただ登ることだけに興味をもっていたが、緑濃い吾妻の山中に岩塊と岩屑の人形石と天狗岩は、一切経山、五色沼付近で砂礫が縞状になったり、環状(網状)になったりしているのは、どちらも厳しい自然環境を示すものであることを知った。また、若女平から藪をこぎ、赤滝、黒滝の落ち口に立った。ここで、二つの沢はかつての尾根で、その間の尾根が沢であったのが、火山活動によって地形が逆転していることを教えてもらった。

米沢の人々は、飯豊山が白くなるのを見て降雪を予測し、西吾妻山に「白馬の騎士」が現れると、本格的な冬の到来を知る。米沢は、新庄と共に多雪地帯である。これは、背後の吾妻山にも言えることで天元台は、県内で最も早く、安定した降雪に恵まれるスキー場として知られている。

冬の吾妻連峰は、牛を伏せたような海拔 1900m の高原状の稜線、長さ 30 km、幅 10 km に渡って樹氷群が広がる。社会人になって間もない頃、地元「米沢山の会」の厚意に甘んじて、主稜線の樹氷群を縫って天元台から明月荘に 1 泊して柵森経由で峠駅を目指したことがあった。天候に恵まれ、スキーは走り早春の楽しいスキーツアーだった。ところが、夜半から天候が崩れだした。明月荘から外へ出るのがやっとの荒れようで、2 度、3 度と柵森への尾根を探すが判らず、結局 3 晩小屋に閉じ込められてしまった。

4 日目、青空に映える歯ブラシ状樹氷を見ながら深雪の中を峠駅へと滑り込むことができた。駅舎には山の会の方々が 7、8 人出迎えてくれた。その中に餅屋の娘さんがおり、餡入り丸餅を美味しくいただいたことを思い出す。余談だが、2 日遅れの帰宅で勤務していた高校の卒業式に間に合わなかった。数日間小さくなって過ごしかけて何らお咎め無しというおらかな世の中が懐かしい。

また、家形山ツアーのベース、五色温泉宗川旅館も心地良い思い出に満ちている。旅館の前には 1 人用のリフトが 1 基の可愛いスキー場だが、わが国最初の民営スキー場(1944 年)であったと聞く。日本のスキー発祥は 100 年前とされている。1911 年(明 44)1 月、オーストリアのレルヒ少佐が新潟県高田市(現上越市)の旧陸軍兵営の庭で若手将校への講習とされているが、ここ五色のスキーは、高田とは別に持ち込まれている。オーストリア人のクラッツラーとウインクラーが雪を求めてここ五色に来てスキーを楽しんだ。高田の講習会 2 ヶ月後のことである。そして、彼らのスキーが五色を中心に広まったというから、日本スキー発祥地の一つとも言える。

また、山やスキーとは関係ないが、1926(大 15)年 12 月、二階離れで、地下に潜っていた日本共産党員 17 名が集り、党大会を開いたことでも知られている。身分を隠すためばらばらに来館したこともあり、1 年後、警察の事情聴取まで宿の主人も気付かなかったという。

旅館の傍に高い石組みの上に建つ重厚な木造建築、六華クラブがあった。1924(大 13)年建設の、皇族、華族専用のスキーロッジである。何年か前に内部を案内してもらったことがあったが、柱の彫り物、ソファなど、これまでお目にかかったことのないものばかりで驚いた。

このような歴史の詰った宗川旅館に宿泊し、家形山へのツアーを楽しんだ思い出が蘇ってくる。もう、30 余年前のことである。ロビーに相当する広間奥の売店には袋入りの香煎が並んでいた。暖簾越しの調理場では、鍋を前にして働くお祖母さんの姿も見えた。夕食に並んだ米沢名物の鯉の甘露煮、雪割り納豆と共に、山のものの素朴な味付けの煮物が並んだ。

翌朝、六華クラブの前を通り、立木に打付けられた年代物のプレートに導かれて家形山を目指した。四郎右衛門沢はじめいくつもの枝沢、尾根を越えた。ジークライト採掘場上方の平坦地を過ぎ、緑樹山荘の上方は小沢沿いのアオモリトドマツ、コメツガの間を縫って家形ヒュッテに出た。半分雪に埋もれながらも囲炉裏があり、煙の匂いが鼻をついた。最後の登りは、これまでにない広く、急な斜面が山頂へと続いており、帰路のスキーの滑りを思い浮かべながら登った。

陽光に暖められた山頂の道標から氷片が崩れ落ちた。その音が墨絵のような静寂を破った。足元には蒼氷の五色沼、その背後に雪を溶かした地肌が所々に見える一切経山、その肩越しに磐梯山が霞んでいた。時が止まったような安らぎの一時を過ごした。

今日では、日本初の民営五色スキー場も、秘密裏に開かれた日本共産党大会の会場となった宗川旅館二階の離れも、皇族専用のスキーロッジ六華クラブも姿を消してしまった。

今年('11)の3月、「米沢山の会」の厚意に甘んじて、天元台に建つ大笠山荘に泊って、若女平と大沢下りのスキーツアーに参加させてもらった。前の樽森を下った時とは、会員の顔ぶれがすっかり変っていた。山荘に張られた印刷物の最上部に懐かしいご芳名を見るだけで、姿はなかった。世代交代した面々の、おらが山への情熱と自信に満ちたリードぶりに、かつてお世話になった方々の姿が重なった。下山後、山の会の方々が向かったのは、世代交代前と同じニンニク味噌で味付けされた羊肉を看板にしている N 羊肉店だった。この店もまた新しい建物に代っていた。

(2011.3)